

「自殺のサイン」の変遷過程

——家族・支援者の解釈に注目して——

○京都大学（日本学術振興会特別研究員 PD）
南山大学

樋口麻里
森山花鈴

1 目的

親密な他者を自殺で失うことによる心理的反応の中に、自殺を防げなかったという気持ちから自分を責める自責、抑うつ、不安がある（高橋 2014）。これらの反応は、「自殺のサイン」という言葉と結びつけられるとき、より深刻になりやすい。いじめ自殺をした子どもの親による証言集を分析した北澤毅は、『なぜ自殺の SOS^④に気がつかなかったのか』という常識的言説に親たちが晒されている（北澤 2015：186）ことへ注意を促している。北澤によると、子どもの様子の異変の解釈は複数存在し、「自殺の SOS」という文脈に一義的に解釈できるものではないという。

他方、精神医療の現場では、医療従事者らは自殺リスクの早期発見と介入という要請から、「自殺のサイン」への気づきと、遺された人々の自責の念への配慮の両方を求められている。しかし、北澤（2015）の指摘を踏まえると「自殺のサイン」は、その实在性を自明視して気づくかを問うのではなく、どのように周囲が自殺者の行動を「自殺のサイン」として解釈するのかを問う必要があるだろう。本報告ではこの問いについて、自殺予防または自死遺族支援に携わる人々および自死遺族へのインタビュー調査から明らかにする。

2 方法

2017年10月～2018年3月に実施した、国内の自殺予防支援者（NPO 法人の代表、精神科医、臨床心理士、スクールカウンセラー）および自死遺族支援者（弁護士、自死遺族の分かち合いの会の運営者）9名（内、自死遺族2名を含む）を対象とする、半構造化面接によるインタビュー調査から、「自殺のサイン」に対する支援者および遺族の捉え方を分析した。調査では、「自殺のサイン」をどのようなものと考えているか、また「自殺のサイン」に対する遺族の反応について尋ねた。

2 結果

「自殺のサイン」に対する語りは、(a) 自殺直前の自殺者の様子に対するものと、(b) 自殺が差し迫っていた時よりも前の時点における自殺者の様子に対するものとに分類された。そして、(a) に関する遺族の語りには「あれが『自殺のサイン』だったかもしれないが、あの時は気がつかなかった」という、「遡及的解釈」（北澤 2015:190）がみられた。また、支援者は (a) について、「自殺のサイン」として気がつけるか断定できないとしていた。その理由として、自殺者は身近な家族には自殺を隠すことがあげられた。一方、(b) について支援者は、元気のなさや不登校といった、必ずしも自殺と直結しない行動や様子の変化をあげており、そこには支援の介入可能性があると考えていた。

4 結論

自殺者の行動に対する支援者と家族の解釈は、時期によって変遷していた。支援者や家族が、異変として解釈する可能性が高い時期は自殺を想定しにくいこと、そして自殺直前になると、身近な他者は「自殺のサイン」として捉えられなくなることが新たに示唆された。

文献

北澤毅, 2015, 『「いじめ自殺」の社会学——「いじめ問題」を脱構築する』世界思想社。

高橋祥友, 2014, 『自殺の危険——臨床的評価と危機介入』金鋼出版。

^④ 北澤（2015）は「自殺の SOS」となっているが、精神医療領域では、「自殺のサイン」という表現が一般的に用いられるため、本報告では「自殺のサイン」の表記を採用する。